

▲▲▲ 私が何時も行く山 ▲▲▲

古 林 宏

今回の特集名には多少沿いかねる様ですが、「私がよく行く山、普段行く山」というのをご紹介します。

何時も登っている山は西武沿線の駅から直ぐに登れる登山コースで、かれこれ20年にもなります。以前は会社勤めがあったので2、3ヶ月に1度くらいでしたが仕事を離れてからは毎月3回程のペースです。

駅から直ぐに登れるという山というのは東京近辺では高尾山をはじめ御岳山や川苔山などがありますが、私の住む赤羽からは池袋経由で行く西武沿線の山々が近くて時間的にも便利で交通費も安く重宝しています。

先ず、利点を挙げてみると利便性が良いことで、池袋からは1時間余りで登山道に到着できることです。平日はラッシュアワーの混雑を避けて7時30分発の特急ちちぶ号に特急券500円を買って乗ると、飯能駅では殆んど待ち時間無しに西武秩父線に乗り換えることが出来て、山への準備をしている間に最寄りの登山口駅に到着するという次第です。交通費は池袋駅から特急券込みで往復2,200円前後です。

特急の‘ちちぶ号’に乗るといつも隣の席が空いているので、2席をキープして持参したコーヒーを飲みながら文庫本を開いてピーナツを齧りながら車窓の景色をバックに足を伸ばしてゆるりと読書するという按配です。飯能駅から始まって終点の西部秩父駅までの10駅、どこで降りても直ぐに登山道が始まっているので、その日の気分や体調でコースを気ままに選択しています。山の標高は高いところで横瀬から行く武甲山の1,304m（高度差：1,058m）、低いところでは高麗駅からの日和田山が305m（高度差：197m）となります。

足の便が良いことの次の利点としては、人の往来が少ないことや山道が程よく整備されていることでしょう。人の少ないことについては余りにも人が居ないので心細くなることがある程で、ときには多くて1時間に2～3人にも出くわすかどうか、と言うこともあり、この点が高尾山などとは違うところです。しかし山道はしっかりと踏まれ、さらに登山道に沿ってほぼ車道が平行に通っていて、その車道は地元の生活道路で、めったに車が走らないところなので、雨の日や疲れた時などはそちらに降りて歩くという選択のできる素敵な山道となっています。できることなら、いつまでもこのように人に知られないでいて欲しいと願っていますが、私の考え違いでしょうね。ただ、景観については挙げて言うような所は無く、杉林が視界を遮る薄暗い樹林の中を歩く感じで、よく言えば森林浴に適した所といって良いのかも知れない所でしょう。しかし駅から近く農家が点在しているという、いわゆる里山が主体となっている辺りなので、季節の風物に心を癒されることが多くあります。

春先には農家の庭先を埋める花木や道路脇の花々が見事に咲き乱れるその様子は高山のお花畑にひけを取らないと思います。秋のころにはそれらが果実となって山間の背景に色合いを添え、里山の親しみある風情を醸し出してくれます。夏の夕暮れに下山すると吾野宿のあたりを流れる高麗川では蛍が飛交う様子を目にすることも出来ます。何箇所か花の名所とされる場所があって、季節には大勢の人で賑わいますが私は敬遠をして別のルートに花を探します。彼岸花、シャガの花、アブラナなどが山道の脇に咲いているのを見ると幸福感が広がります。

登山ルートは多様で同じ駅からのコースにも何通りかがあり、いわゆる男坂や女坂のように急傾斜のコースもあれば緩傾斜のところを選択することもできます。ですが、これらの登山コースは縦に登ることよりも横に歩く事を楽しみたいと思っています。どのルートをとっても平均して10キロから13キロほどの距離があって、長いところでは正丸峠から伊豆ヶ岳を経て子の権現へ至るコースは15キロを越えます。武甲山のコースも15キロほどありますが、長いからいいというのではなく、それほどアップダウンが無くて長距

離を歩けるのが良いのでしょう。その一方で、秩父に向かって左側の山塊はややアップダウンが強く、双子山や武川岳などはこのところ足が遠退いているところです。



(アブラナ)



(山桜?)

里山ともいえるこれらの山の面白さは座って体を大きく伸ばせるような場所があるところです。延びやかに平面的に広がったところがありますが、東吾野駅から行くユガテや吾野駅から行く摩利支天前がそんな場所で、横瀬駅から行く寺坂には段々の棚田までが広がっています。そんな陽だまりの草むらがお昼の弁当を広げる格好の場所になっていて、顔なじみの猫に会うとお握りの半分を強請られています。そんな一角、高山不動の門前で弁当を広げていて、ふと見上げると小学校という看板がかかっていました。標高600メートルを越える山の中に小学校があるのかと近づいてみたら、小さな建物が校舎でした。確かにそこからさらに登って行くと小さな集落らしいのがあって、何軒かの家が軒を並べている。こんな高山に忽然として人家が集まるというのはどういうことかと不思議に思ったのですが、よく判らない。その先を少し歩くと標高770mの関八州見晴台がありました。



(土筆)



(シヤガ)

山道に沿って神社や仏閣が多くあるのも面白い。ある意味で史跡散策といった雰囲気です。日和田には高麗王の菩提寺として建てられた聖天院や高麗神社があつて歴史を感じさせます。西吾野から登る高山不動は608メートルの高さで樹齢800年の大銀杏があり、さらに下りて吾野宿に出ると武蔵野三十一番札所の法光寺が建っています。吾野の駅から顔振り峠を過ぎたあたりでは集落の鎮守として建てられた諏訪神社が、そして山道の出口には福德寺の阿弥陀堂は屋根の曲線が美しい国の重要文化財指定となっています。そして正丸駅からは伊豆ヶ岳を経て足腰の神仏としての‘子の権現’が鉄のわらじでお出迎えです。西武秩父駅に降りて2時間ほど歩くと岩井堂と護国観音、大淵寺が山の側面に建っています。やがて秩父の札所23番や、16番に秩父神社、15番札所と13番。どうやら秩父巡礼者になってしまいそうです。


寂しいのは茶店が少なくなってしまったことです。今残っているのは2箇所ほどで、吾野駅から行く顔振り峠の富士見茶屋は疲れた体に蕎麦と漬物が美味しい茶店。そこは顔振り峠の名の通り展望が一番の場所。他に関八州展望台とか日和田山からの展望もあるのですが、ここが一番。語源では源義経がこの峠を越える際

に見事な景色を振り返ったことに由来するとのこと。したがって、‘かおぶりとうげ’と現地では呼ぶんだそうです。

‘子の権現’を下りたところには浅見茶屋というのがあって、そこの手打ちうどんも美味しかったのを記憶しています。伊豆が岳からの長旅で疲れた後の味わいもまた格別といったところです。その他に2, 3軒あった茶店が店主の高齢のせいか店を閉ざしてしまっています。正丸峠への道筋にあった鈴木屋のお婆さんは話し好きで、よく店先から話しかけてきましたが数年前から窓口を締めたままで、その先の中村屋も年寄り夫婦とその娘さんで店を開いていて、よく蕨もちを買ったのですが、今はシャッターを下ろした状態です。高山不動への途中にある萩の平茶屋は廃屋となっています。

今、歩いている山の延長線上で考えているのは「街道」です。以前に買い揃えておいた司馬遼太郎の「街道シリーズ」を再び読み始めたこともあって、高い山に登る力が無くなっているのも横に歩こうかと考えている次第です。いろいろと調べていると西武沿線の山々の延長線上には川越街道、秩父街道があって、それらが甲州街道と中山道と交差しているようなのです。甲州街道には日野宿、小原宿、上諏訪宿、小仏峠、笹子峠などがあり、中山道には和田峠、塩尻峠、鳥居峠、十三峠、摺針峠、奈良井、福島、妻籠、と。さらに日光街道には、日光東照宮、杉並木、宇都宮宿などと、いやだんだんと面白くなって来たようです。四国遍路と同じ様なのだけれど街道を歩くのも良いのかなと考えているところです。



「会員の山行リスト」に戻るには 画面最上部左端の 戻るボタン  で 戻って下さい